

要介護高齢者と介護職員の脱アサイラム研究

——特養ホームにおける介護自治文化の形成過程のフィールドワーク——

内容の要旨（3,000 字程度）

本論文は、特養ホームに入所する要介護高齢者と、そこで働く介護職員に焦点を当てて、「措置から契約へ」あるいは「収容の場から生活の場へ」と大きく社会変動をむかえる福祉の介護現場でいま起きつつある事実を〈21 世紀型介護自治文化〉としてまとめた成果である。

本研究の問題意識は、第一に、要介護高齢者の〈エンリッチ・エイジング(enriched aging)〉の理論と実態を明らかにすることである。〈エンリッチ・エイジング〉とは、たとえ麻痺や認知症になったとしても、自己決定や自己表現によって尊厳をもってむかえることのできるような豊かな老いを意味する。とりわけ、在宅ではなく施設で介護を受けている要介護高齢者——軽度の麻痺や障害をもった高齢者、認知症高齢者、そして寝たきり高齢者——の〈エンリッチ・エイジング〉をありのままの生活過程として浮き彫りすることを目指した。第二は、三つの異なるタイプの特養ホームで働く介護職員の〈介護自治文化〉の形成過程を、高齢者福祉政策の歴史的経緯、施設の経営方針と地域性、労働関係、労働環境といった諸観点から、それぞれ比較しながら実証的にその労働過程を明らかにすることである。

問題意識の第三は、第一に挙げた要介護高齢者の生活過程と第二に挙げた介護職員の労働過程の両過程を見据えて、特養ホーム全体が、〈流れ作業的介護〉や〈ベルトコンベア式介護〉から脱却し、〈脱アサイラム化〉もしくは〈脱施設化〉してゆく過程を考究した。特養ホームは、入所する要介護高齢者にとっては生活の場であるのだが、他方で、介護職員にとっては労働の場である。ここに両者の相いれなきの根拠がある。だが、この相いれなきを乗り越えていくことこそが、21 世紀型の契約・生活感覚にもとづく介護が目指すものであると、介護現場に関わる者たちの共通した認識になっている。すなわち、要介護高齢者の〈エンリッチ・エイジング〉と介護職員の〈介護自治文化〉の両者が渾然一体となって、〈脱アサイラム化〉した 21 世紀型の〈契約・生活型介護文化〉が作られていくことをデータから明らかにすることを目指した。

本研究の調査方法では、質的調査のフィールドワークの手法を採用した。本研究の問題意識に適合する方法である。具体的には対面の面接法や集団面接法を主軸として、補足的にアンケート調査も実施した。鹿児島都市圏、奄美離島圏、そして札幌大都市圏の三地域における特養ホームに入所する要介護高齢者とそこで働く介護職員を対象にフィールドワークを行なった。これら三つの特養ホームは、具体的には、鹿児島都市圏の特養ホーム「K 園」、奄美離島圏の特養ホーム「S 園」、そして札幌大都市圏の特養ホーム「T 園」である。これらの特養ホームを、経営態度、地域社会への態度、厚生労働省型介護文化への態度の相違によって、三つの理念型——経営熱心・家族密着・対抗型、経営責任回避・地域融合・

従順型、そして経営者不在・地域孤立・無関心型——とそれぞれカテゴライズした。これらの類型化を行なった目的は、特養ホームに入所する要介護高齢者の〈エンリッチ・エイジング〉が異なるタイプの特養ホームと比較してどのように差が出てくるのかを明らかにするためである。

本研究で調査する特養ホームがアサイラムであるという立場を採用しその根拠を示すために、アーヴィング・ゴッフマンのアサイラム研究を検討した。これはゴッフマンが精神病棟のフィールドワークによって理論化した学問知であり、特養ホームを研究対象とする本研究の分析装置として応用できる部分の多いものである。具体的には、被收容者と職員の「根源的裂け目」、被收容者の「自己の無力化」、「第二次的調整」を取り上げて検討し、これらの概念が特養ホームにおいて説明能力をもっているかどうか考察した。さらに、ゴッフマンの成果を敷衍させた本稿独自の分析概念である“第三次的調整”や、つかず離れずの“微妙な関係”を提案した。また、施設全体を一体化させ、被收容者と職員のあいだの「根源的避け目」を埋める効果のある、アサイラムにおける儀礼の役割について紹介し、ここから形成される被收容者の生活文化や役割解除についても検討した。その結果として、ゴッフマン研究から導き出された概念を駆使して、特養ホームにおける〈エンリッチ・エイジング〉と〈介護自治文化〉を分析するための概念として、「ユニットケア」と〈介護業務構造〉という考え方を打ち出した。

じっさいの実証分析は、第六章から第八章までである。第六章では、施設入所者の世界として、アサイラムの生活過程について考察を深めた。第一節では、要介護高齢者のエンリッチ・エイジングと対極にある「自己の無力化」についてその実態を明らかにし、第二節ではそのような「自己の無力化」を入所者がどのように回避しているか、そのパターンを——単独で行なう“第一次的調整”，仲間と結束して行なう「第二次的調整」，そしてつかず離れずの関係形成である“第三次的調整”を——体系的に整理した。これらはすべて元気高齢者に限定された概念である。「自己の無力化」を回避することによって、元気高齢者は〈エンリッチ・エイジング〉に接近できるといえよう。つづいて、入所者のなかでも、認知症高齢者における「自己の無力化」はどうなっているのか検討した。その結果、認知症への無知や認知症高齢者差別が施設において顕著に観察されること、認知症にも〈良いボケ〉と〈悪いボケ〉があること、ヒーリング機能をもつ認知症高齢者が存在すること、このような諸事実がデータから導き出された。ここでは、〈悪いボケ〉方をした高齢者にどのような働きかけをおこなえば、〈良いボケ〉方に変化させることができるかといったことが議論された。第六節ではゴッフマン研究における被收容者の四類型を敷衍させて、特養ホーム入所者における四類型を抽出した。それは、〈戦略ドラマトルギー型〉、〈孤立チャレンジ型〉、〈協調サティスファイ型〉、そして〈模範パッシブ型〉である。アサイラムという《特養システム》のなかで、入所者は様々なタイプの回避によって、「自己の無力化」を乗り越えようとしている実態があった。

第七章では、介護職員の世界として、アサイラムの労働過程について分析をおこなった。

第一節では、介護職員が理想とする介護サービスについて考究した。具体的には、ユニットケアの推進、認知症高齢者ケアの普及、そして介護技術の向上の三点にまとめられる。この三点は、第三章で言及した〈厚生労働省型介護文化の三本柱〉とほぼ同じ内容であった。第二節では、介護職員が仕事上で困ったときに相談する相手について、介護職員の労働関係論的な分析を施した。第三節では、介護職員が労働関係や労働過程において抱える様々な葛藤を明らかにした。入所者と介護職員のあいだの葛藤、〈措置感覚のケアハビトゥス〉と〈契約感覚のケアハビトゥス〉のあいだの葛藤、〈身体介護業務〉と〈生活支援〉のあいだの葛藤、そして若手介護職員とベテラン介護職員のあいだの葛藤——これらの葛藤は、介護職員に〈介護労働の疎外化〉をもたらす危険性があった。そこで〈介護労働の疎外化〉を超克するために、介護職員がとる戦略に関しても分析できた。

最後、第八章では、結論に迫るテーマ、すなわち特養ホームにおける〈脱アサイラム化〉と〈介護業務構造〉について検討した。結論として、入所者の生活過程と介護職員の労働過程をダイナミックに結びつけ、「根源的裂け目」を埋める機能を果たすのは「ユニットケア」であるということが明らかになった。入所者の〈エンリッチ・エイジング〉と介護職員の〈21世紀型介護自治文化〉の形成は密接に絡み合っている。この事実が意味することは、ゴッフマンが提案した職員と被収容者のあいだの「根源的裂け目」が埋まりつつあり、これがユニットケアという少人数制の介護を実践することによって高齢者どうしの「馴染みの関係」や「繋がっている感覚」を形成しているということである。だが、〈エンリッチ・エイジング〉達成のためには必ずしも「ユニットケア」を切り札にはできないことも今後の課題として残された。